

# 舍利弗・目連の旧師サンジャヤ

畠 昌 利

0. ブッダの二大弟子と称される舍利弗・目連が、帰仏前はサンジャヤという異教者の弟子であったことは夙に知られ、その帰仏の場面は、「舍利弗・目連の改宗」記事として、律文献をはじめとする様々な仏伝にモチーフを提供してきた。他方、彼らの改宗記事には、文献間により様々な異同があることが指摘されている。本稿では、この複数ある相違の中、彼らの帰仏以前の旧師サンジャヤに焦点を当て、仏伝の伝承が孕みうる問題の一部を指摘することとする。

1. 旧師サンジャヤを、六師外道のサンジャヤ・ベーラッティップタであると看做す説はかなり古くから存在する<sup>1)</sup>。たとえば、Jacobi [1895], p. xxix は、仏教と不可知論との関係に関して舍利弗・目連に言及しているし、本邦でも木村泰賢 [1922], p. 68 が同様の立場を探っている。また事典の類でも赤沼 [1931], 望月 [1932], DPPN [1937] では、両サンジャヤを同一項目で取り扱っており、近年では、有部系の梵文資料を扱った SWTF [2012] も同様の処理を行っている。また、この様な形で舍利弗・目連と六師のサンジャヤ（懷疑論者）を結びつけることによって、仏教思想の無記と懷疑論の関係を考察する研究も存在する<sup>2)</sup>。

他方、これら諸説に反論する形で、両サンジャヤを別人とする説も存在する。たとえば Franke [1913], p. 50, n. 6 は、両サンジャヤを同一とした場合、統治するマガダ王の年代上の不一致が生じる点などを指摘し、同一人物説に反対している。それ以降も、同一人物説を疑問視する説は、Barua [1921] などにより主張されており<sup>3)</sup>、近年では、テキストの所属部派によって伝承が異なる点、Pāli の伝承では両サンジャヤを同一にしない点などが主張されている<sup>4)</sup>。

2. Pāli 聖典では、六師外道のサンジャヤと旧師サンジャヤは以下のように登場する。前者はサンジャヤ・ベーラッティップタという呼称が為され、対論者の質問に対して確定的な返答を出さない<sup>5)</sup> 懐疑論者・不可知論者として描かれる<sup>6)</sup>。次に、旧師サンジャヤの記述は、Vinaya の Mahāvagga に存在する。

さてその時、サーリップタとモッガッラーナは遊行者サンジャヤの下で修行していた。

【この後、仏弟子アッサジより、「縁起法頌」を聞いた舍利弗はブッダの下での出家を決意し、目連と共に、サンジャヤを振り切って帰仏する。】さてサーリ普ッタとモッガッラーナは、その250人からなる遊行者達と共にヴェールヴァナの方へ近づいた。他方、遊行者サンジャヤはほかならぬその場で口から熱い血を吐いた。（Vin I, pp. 39–42）

この他、Apadāna, p. 24では、舍利弗が自らの半生を回顧する中で「サンジャヤ」という名の婆羅門に言及する。以上のPāli聖典の用例からは、旧師サンジャヤは「遊行者サンジャヤ」或は単に「サンジャヤ」と称されていることが分かる。

次にPāli註釈文献の用例を確認する。例えばSamantapāśādikāでは先のMahāvaggaを註釈し、サンジャヤは「着衣の遊行者」と説明する<sup>7)</sup>。この他、Pāli註釈には舍利弗・目連の改宗記事が複数伝えられ、それらの間には若干の異同が存在するものの<sup>8)</sup>、サンジャヤの素性に関しては「サンジャヤ」或は「遊行者サンジャヤ」とされるのみであり、tīkāにおいても概ね同じ状況が踏襲される。

Dīghanikāya第1経の「梵網経」では、冒頭にスッピヤ(Suppiya)という遊行者が登場する。そしてPāli聖典内で、彼に言及があるのはこの個所のみである。ところが註釈では、このスッピヤが遊行者サンジャヤの弟子であると説明され(Sumāngalavilāsinī I, pp. 35, 41)，同様の記述は12世紀ごろのtīkāでも為される。この様に、Pāli註釈文献において遊行者サンジャヤは一定の存在感を保っていた。しかし、彼が六師外道のサンジャヤであるという記述は、少なくともPāliの伝承には見られず、そもそもそのような問題意識すら持たれなかった印象を受ける。以上の解釈は先に挙げたEncBuddh [2006]の指摘に合致するものである。

3. いわゆる説一切有部系の文献群の中で旧師サンジャインに言及するのは、Catuspariṣatsūtra(=CPS)とMūlasarvāstivādavinaya Pravrajyāvastuである。

CPS § 28では先のMahāvaggaに相当する記述が存在する。そこでは、サンジャインは異教の宗派の名前として挙げられており、また、ウパティシュヤ(舍利弗)がアシュヴァジットと出会った時点で死去していることになっている。また、当該箇所のパラレルと看做される文献でも同様の状況である<sup>9)</sup>。

Pravrajyāvastuでは、舍利弗・目連の誕生から出家までの経緯が詳細に説明されている。そしてここで伝えられる内容の1つの特徴は、舍利弗・目連がサンジャヤの下で出家する前に、六師外道のもとを訪れている点である<sup>10)</sup>。

その時、プーラナをはじめとする六人の教師は、全てを知らないのに全てを知っていると思い上がっていた。即ち、プーラナ・カーシュヤパ、マスカリン・【ゴーシャーリー・プトラ、サンジャイン・ヴァイラティープト拉、……それから、婆羅門少年のウパティ

シュヤとコーリタの2人は】、プーラナ・カーシュヤパの所へ行った。 (p. 60)

六師外道の一人としてのサンジャインの名前が挙がっており、その点は梵文断片や漢訳でも確認できる<sup>11)</sup>。次いでウパティシュヤとコーリタは、サンジャインを含む六師を順に訪問し、何れの教説にも満足しないという記述が続き、その後、先に引用したCPSの冒頭文に相当する記述が続くのである。

その時、【宗祖である】サンジャインなる者が【現れて間もなかった。その後、婆羅門少年のウパティシュヤとコーリタ両名はサンジャイン先生の所へ行った<sup>12)</sup>.】 (p. 72)

この後、ウパティシュヤとコーリタがサンジャインの下で出家し、師の病死後、アシュヴァジットに出会う。重要な点は、梵藏漢いずれの資料においても、2人が六師外道のサンジャインの所説を却下したのちに、宗祖サンジャインに出会う点であり、これにより、両サンジャインが別人と看做されていることが分かる。

4. 大衆部所属の説出世部の律と伝えられる *Mahāvastu* (=Mvu) にも舍利弗と目連の改宗記事が存在する。相当漢訳と看做される『仏本行集経』と共に確認する。

またその時、ラージャグリハに、ヴァイラティーの息子であるサンジャインという名前の遊行者が500人の遊行者を有して逗留していた。少年婆羅門であるかのシャーリプトラとマウドガルヤーヤナは、遊行者の庵へ行って、ヴァイラティーの息子である遊行者サンジャインの下で、遊行者として出家した。 (vol. 3, p. 59)

同様の表現は逐語的には一致しないものの『仏本行集経』にも現れる<sup>13)</sup>。ところで、Mvuの伝える当該説話では、場面によってサンジャインへの呼称が変化する<sup>14)</sup>。しかしいずれにせよ、旧師サンジャインが六師外道の一員<sup>15)</sup>と看做されることは明らかであり、同じ現象が『仏本行集経』にもみられることから、6世紀後半には、説出世部においてこのような伝承が成立していたことが分かる。

5. 以上のはか、漢訳で伝承される律・仏伝文献には、舍利弗・目連の改宗を伝えるものが複数ある。その中、旧師サンジャヤに言及されるものを挙げてみると、例えば『五分律』と『四分律』にはそれぞれ、「沙然」(T. 22, p. 110b), 「刪若梵志」(T. 22, p. 798c) という名前が見出され、正確な原語は不明ながらも, Sañ-jaya/Samjayin に近いインド語を想定し得る。そしてこの両者以外でも同様であり<sup>16)</sup>、目下問題とする旧師サンジャヤの素性に関して新たな情報を見出さない。また、中国撰述の註釈類が舍利弗・目連の改宗に関して纏まった記述を為す場合は、『仏本行集経』などに基づくか、大部を引用することがしばしばである<sup>17)</sup>。

6. 次に以上の資料を個別あるいは複数取り上げ検討した先行研究を確認しておく。Lamotte [1949] は、舍利弗・目連の改宗に関する諸文献を網羅的に検討

(198)

舍利弗・目連の旧師サンジャヤ（畠）

した後、それらを両サンジャヤを同一視する古伝承 (Pāli, Mahāvastu) と、別人とする新伝承 (『根本有部律』) に分けていた。それに対し Waldschmidt [1951] は、テキストを新古に分ける態度を批判する。その後も、Migot [1954], Bareau [1963: Recherches], Lamotte [1976], 高木 [1979] によって、上掲した複数の文献が検討され、部派によりサンジャヤの素性が異なる点が確認される。しかし目下問題としている Pāli や『五分律』その他大多数の文献のように、両サンジャヤを同一とも別人とも明記しない文献の解釈に関しては、断定的な結論が出せないままである。

7. 以上の問題意識を持つつ、筆者は Pāli 文献が伝える旧師サンジャヤは六師のサンジャヤとは別人と解すべきであると考える。最大の理由は、Pāli の聖典から註釈, tīkā にいたるまで、両サンジャヤを同一視する記述が存在しないという事実を重要視するからである。また、「遊行者」(paribbājaka) という語が<sup>18)</sup>、一種の名前の一部として機能し得ると考えるのも理由の 1 つである。すなわち、Pāli では、旧師サンジャヤは一貫して「遊行者サンジャヤ」という呼称が用いられた。そしてサンジャヤの下で修業していた舍利弗・目連も同様に「遊行者」と呼ばれており (Vin I, p. 40), 「遊行者」という呼称は、それが付された人物のステータス、アイデンティティを示す語であったことが分かる。また AN 10.116 では、遊行者アジタ (Ajita paribbājaka) なる者が登場するが<sup>19)</sup>、彼が六師外道のアジタ・ケーサカンバラ (Ajita Kesakambala) と同一視されることはない。以上を考慮に入れれば、少なくとも Pāli 文献の伝えるところにおいては、「遊行者サンジャヤ」なる一人の独立した人物が意識されていた可能性が高いと考える。

次に、これまで見た聖典や註釈の記述と離れた各地の伝承においては、両サンジャヤを同一人物と看做す傾向が生じる点を確認しておく。例えば、Bigandet [1880] はミャンマーの伝承を伝える Pāli 語の 2 書<sup>20)</sup> (18 世紀後半) を資料とし、

ウパティッサ (Oopathi)・コーリタ (Kaulita) は不死を求めて、六師外道 (Mekkali, Gau, Sala, Thindzi, Jani, Ganti) の中から Rahan (遊行者?) である Thindzi の下で修業する。

という Pāli の伝承にはない内容を伝える。また、中国編纂の『統一切經音義』(10 世紀後半) は、『根本有部律出家事』の旧師「珊逝移」を以下の様に釈する。「上蘇乾反梵語外道名也。前破僧事第二卷中已具解釈也。」(T. 54, p. 974c) 下線部の『破僧事』では六師外道の「珊逝移」が扱われており、両サンジャインを別人とする『根本有部律』とは異なる解釈が登場している。この様に、三蔵から離れた後代の伝承では、サンジャヤを同一人物と看做すべく伝承が変化する場合がある。

8. 最後に、赤沼 [1931] に対する評価を述べつつまとめとする。上記した通り、赤沼 [1931] は、両サンジャヤを同一項目で扱う。しかし、これは Mvu や『仏本行集經』の用例がある以上、やむをえない措置であったと考える。実際、赤沼 [1920], p. 444 では、両サンジャヤの同一視に含みが持たされており、赤沼師自身がサンジャヤの素性に関して問題意識を持たれていた点が窺われる。他方、このような事典の記述を手掛かりに、異部派の文献が伝える諸要素を繋ぎ合わせて 1 つの仏伝を構成した場合、本来意図されていない内容の仏伝が創り出される可能性も存在する。サンジャヤに関する誤解はまさにその一例であると考える。ただし、このような諸文献の整理・再解釈は、部派に関する研究の蓄積を経てこそ可能になったものであり、今後は、部派毎の伝承をより意識した資料処理が求められる。また同じ理由から、特定の部派の文献を扱いながら、当該部派の伝承と異なる情報を記載する DPPN や SWTF の記述は訂正される必要がある。

- 
- 1) Kern [1896: Manual], p. 32 など。 2) 中村 [1992], pp. 625–641; 村上 [2011], pp. 106–114. 3) Barua [1921], p. 325; Pande [1957], p. 350, n. 188; Freiberger [1997], p. 123, n. 9. 4) Vogel [1970], p. 5; EncBuddh [2006]. 5) *amarāvikkhepa* の語義に関しては、拙稿 (Hata [2009]) を参照されたい。なお、拙稿の結論に対し村上 [2011] で反論が為されているが (p. 125, n. 23)，これは訳語に対する立場の相違によるものと考える。拙稿では、現存する資料を用い *amarāvikkhepa* という要語の語義に関し、蓋然性の高い解釈を示したに過ぎない。*amarāvikkhepa* と称されるサンジャヤの教説が、「懷疑論」や「不可知論」に帰されるべきという点については、筆者も異存はない。
- 6) DN I, p. 58. 六師外道のサンジャヤの名は、DN II, p. 150; MN I, pp. 198, 250 などにも登場する。 7) Sp V, p. 974. 8) Ja I, p. 85; Mp I, pp. 155–161; Dhp-a I, pp. 88–95; Tha-a III, pp. 90–96 = Ap-a, pp. 206–212; Ap-a, p. 90; Thī-a, p. 3; Sn-a I, pp. 325–328.
- 9) CPS の当該箇所との親近性が指摘される『仏阿毘曇經出家相品』に引用される律文獻 (T. 24, p. 961c; cf. Sasaki [1985].) や、有部の仏伝を伝える藏訳 *Abhiniskramanasastra* も同様の内容を伝えており、特に後者は CPS とほぼ逐語的な一致を見る (Otani no. 967, Šu 90b1f.). 10) 藏訳テキストは Eimer [1983] を使用。また、梵文断片 (Vogel & Wille [1984]) が存在する部分を【】で示す。 11) 梵文断片: Fol.[9]vl; 漢訳: T. 23, p. 1025ab. 12) 梵文断片 (Fol.[11]r5) では引用した藏訳の箇所に *tasya* とあるが、他断片から判断して、藏訳と同様の表現が、前後で用いられていたと予想する。
- 13) 「波離闍婆刪闍耶」「刪闍耶外道」「刪闍耶毘羅瑟智之子」(T. 3, p. 875b). 14) 舍利弗・目連とサンジャインの決別の箇所では「遊行者サンジャイン」あるいは「サンジャイン」と称され (p. 63), 『仏本行集經』も同様 (p. 887b). 王舍城でブッダの悪評が流される場面では、「ヴァイラティーの息子である遊行者サンジャイン」(p. 90) とある。 15) 六師外道のサンジャイン (*Samjayin Vairattikaputra*) は Mvu I, p. 256f., III, p.

(200)

## 舍利弗・目連の旧師サンジャヤ（畠）

383 にも登場。 16) 「沙然」(T. 4, p. 153c); 「刪闍夜」(T. 14, p. 768a); 「珊瑚耶伽」(T. 24, p. 841b); 「刪闍耶」(T. 25, p. 136b). 17) T. 33, p. 189f.; T. 34, pp. 12ab, 174a, 180f., 515b, 739c; T. 37, p. 334b; T. 38, pp. 283c, 284a; T. 38, p. 773a; T. 51, p. 924b; T. 53, pp. 69c, 523c. 18) Freiberger [1997] は、*paribbājaka* を「特定の教団や教主に属さない非仏教の修行者」と結論付ける。 19) AN V, pp. 229–323; ただしタイ版は Ajina の読みを伝える。相当漢訳: 阿夷那 (T. 1, p. 734a) と一致する故に, Ajina の読みを探るべきかもしれない。 20) Cf. de Jong [1981].

## 〈参考文献〉

※ Pali 文献の略号は慣例に倣う。Pāli 以外の文献の略号ならびに刊本は, H. Bechert (ed.), *Abkürzungsverzeichnis zur buddhistischen Literatur in Indien und Südostasien*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht (=VR), 1990 を参照。その他の二次文献は以下の通り。  
 赤沼智善 [1920]: 「舍衛城及び祇園精舎の研究」『佛教研究』1-1 = 『原始佛教之研究』, 法藏館, 1981, pp. 431–464; 赤沼智善 [1931]: 『印度佛教固有名詞辭典』, 破塵閣書房; Barua, B. [1921]: *A History of Pre-Buddhist Indian Philosophy*, repr., Delhi: Motilal Banarsi-dass, 1998; Bigandet, P. [1880]: *The Life or Legend of Gaudama*, vol. I, London: Trübner; Eimer, H. [1983]: *Rab tu 'byuṇ ba'i gži*, Wiesbaden: Harrassowitz; Franke, O. [1913]: *Dīghanikāya*, Göttingen: VR; Freiberger, O. [1997]: “Zur Verwendungsweise der Bezeichnung *paribbājaka* im Pāli-Kanon,” *Untersuchungen zur buddhistischen Literatur*, 2 Folge, Göttingen: VR, pp. 121–130; Hata, M. [2009]: “On *amaravikkhepa*,” *IBK* 57-3, pp. 1193–1198; Jacobi, H. [1895]: *Jaina Sūtras*, pt. II, [SBE, vol. 45]; de Jong, J. W. [1981]: “Review of H. Bechert, *Burmese Manuscripts*, pt. 1,” *IJ* 23-3, pp. 238–239; 木村泰賢 [1922]: 『原始佛教思想論』, 丙午出版社; 望月信亭 [1932]: 『望月佛教大辞典』vol. II, 増訂版, 1955, 世界聖典刊行協会; 村上真完 [2011]: 「諸法考—— dhamma の原意の探究と再構築—— (6)」『佛教研究』39, pp. 95–125; Lamotte, É. [1949]: =Mppś, tome II; Lamotte, É. [1976]: =HBI; Migot, A. [1954]: *Un grand disciple du Buddha: Śāriputra*, Paris: d'Amériqueet: d'Orient Adrien-Maisonneuve; 中村元 [1992]: 『ゴータマ・ブッダ I』, 春秋社, 1992; Pande, B. C. [1957]: *Studies in the Origins of Buddhism*, Allahabad: University of Allahabad; Sasaki, S. [1985]: “Fo-ê-p'i-t'an-ching-ch'u-chia-hsiang-p'in: 仏阿毘曇經出家相品,” *IBK* 33-2, pp. (16)–(23); 高木諦元 [1979]: 「舍利弗の帰仏に関する一, 二の問題」『佛教学論文集』=「舍利弗の帰仏」『初期佛教思想の研究』, 法藏館, pp. 89–110; Vogel, C. [1970]: *The Teachings of the Six Heretics*, Wiesbaden: Deutsche Morgenländische Gesellschaft; Vogel, C. & Wille, K. [1984]: *Some Hitherto Unidentified Fragments of the Pravrajyāvastu Portion of the Vinayavastu Manuscript Found Near Gilgit*, Göttingen: VR; Waldschmidt, E. [1951]: “Vergleichende Analyse des *Catuspariṣatsūtra*,” =CT, pp. 164–202.

〈キーワード〉 サンジャヤ, 舎利弗, 目連, 仏伝, Sañjaya, Samjayin

(大阪大学非常勤職員, 博士 (文学))